

アルザス史 6 第一次大戦によるフランス化

志村 良知

1914年第一次世界大戦勃発。ドイツ領だったアルザスとフランス国境は現在のロレーヌ南部（ムルト県、ヴォー県）との境のボージュ山脈の稜線だった。山岳戦の定石は山頂の奪取である。360度、100kmは楽に見通せる観測点として山頂群の奪いあいのため、塹壕戦が繰り広げられた。塹壕の一部は現在でも戦争遺跡として残され、見学可能である。また稜線を縫って作られた軍用道路（クレタ街道）は現在では見晴らし最高（最高の条件が揃えばモンブランやアイガーが見える）の気持ちの良い観光ドライブウェイとなっている。

町や村の名前、人の姓、家の造り、さらに精神活動の中心の言葉もドイツに近いアルザスがプロイセン＝ドイツ帝国領になってフランス排斥政策の統治を受けたにもかかわらず、アルザスには熱烈なアルザス愛国者であるがどっちかに付くなら絶対フランス、というフランス・アルザス主義者も多かった。彼らの中にはフランス側についてドイツと戦った人達もいた。一族郎党が両国に分かれて戦ったという例もあった。

アルザスの土産物屋で売られている絵や飾り皿や絵ハガキでよく見かける、可愛いアルザス民族衣装の子供たちを描いたコルマル出身の画家のアンシ（Hansi＝画家としての筆名）も熱烈なフランス・アルザス主義者だった。彼が描いた「反プロシャ・親フランス」のアルザスの子供たちの絵は現在でも「あら、可愛い」と愛されているが、これもフランス本土人に「アルザス人はみんなフランスが好き」という一種の誤解を与えている要因だという。

1919年、第一次大戦の始末をつけるベルサイユ条約で、アルザスはフランスとなった。

実は大戦終了直後、今日に至るまでの歴史の中で「独立国アルザス」に一番近くなった瞬間があった。講和を前にドイツの後押しで進められた親ドイツの「アルザス・ロレーヌ共和国」の建国で、国旗も横長の赤い旗の左肩に黄色いロレーヌの十字架  首都はストラスブールと決まっていた。しかし独立派にはロシア革命（1917）に意気上がるコミンテルン配下の共産主義者が加わっており、ストラスブール大聖堂に共産党の赤旗が掲げられたりしたことからベルサイユ会議前にフランスが軍を緊急動員してストラスブールを制圧、「アルザス・ロレーヌ共和国」は11日間の揺動だけで終わった。しかし、たとえ独立できたとしてもソビエト連邦成立（1922）より早い世界最初の、それも親ドイツの共産主義国家をこの状況で

フランスが認めるわけが無く、早番叩き潰されていたであろう。

フランス政府はアルザス・ロレーヌのフランス化専門機関、アルザス・ロレーヌ局を設立、中央主導で徹底的なフランス化を図った。手始めに政府選別委員会の定義による「ドイツ人」のドイツへの追放を行った。その数は、密告、私怨、意趣返しなどを呼び、結局10万人に及んだ。これ以降もこの地で大規模小規模に何度か行われた征服側による住民の選別＝民族浄化の最初だった。これに比べるとプロイセンによる親フランス分子4000人の追放など可愛いものだった。

フランスは戦争中には本国と植民地居住のアルザス人も敵国ドイツ人として収容所送りにして過酷な扱いをした。収容された人たちの中には、二人ともアルザス人であったため、診療活動中のフランス領赤道アフリカ（現ガボン）で敵国人として身柄拘束され、フランス本国に送還されたアルバート・シュヴァイツァー夫妻もいた。

町、通り、広場の名前のフランス語化、初等教育の徹底的なフランス語化を行い、アルザス語、ドイツ語を排した。パリから再び大量のアベル先生が投入されたわけである。

しかし、それでもアルザスはアルザス、フランスとの同化は困難だった。大人の大部分はアルザス語しか話せなかったし、アルザスはストラスブールに攻め込んだフランス兵が、上下水道が完備されたアパートの存在など市民の生活水準の高さにびっくり仰天したという話があるくらいで、フランス本土の平均より遥かに豊かだった。アルザス人にとって自分たちより貧しいフランスとの同化は何のメリットもなく、フランスになりたがらなかった。強引なフランス化は親フランスの住民からさえ反感を買った。

その中で、アルザス・ロレーヌ局は粛々と事を進め、アルザス・ロートリンゲンの三つの県がアルザス・ロレーヌとしてフランスの他の県と平等の扱いになったのは1924年のことで、そこでようやくアルザス・ロレーヌ局は廃止された。

7.第二次大戦勃発 大エクソダス。に続く